

ニコラ・カンティオンとローランス・ヤディ  
「リッスンアンドウオッチ/LISTEN & WATCHE」

十字架に貼り付けられたキリストか、鳥を連想させるポーズの男性が浮かび上がり、いつのまにか不協和音から協和音へと変わっていくギターの音。するする、クネクネという印象の踊りで、定位置からほとんど動かずにいるのに、見ていて飽きないのは、動きの質が豊富だからだろうか。次元があって高さがある。そして、するするととどまることを知らない身体が、時々日常の1コマとなる。「雨の中、傘をさしてとぼとぼ歩いていたら、水がどんどん増してきて、波が来て、風が起こり、魚が寄ってきて、、、」というような物語が見えたり、ウオークマンから流れる音楽に合わせて身体を揺すってみたりと、日常の動きや夢物語が親しみを感じさせたのかもしれない。そして思いがけない手の動きにはっとする。独創的な作品だと思った。また、ギターのステファン・パシヨ＝ユンガンが、踊りを良く見ていて、2人の付かれず離れずの関係も良かった。



(C)DorotheeThébert